

『源氏物語』起筆伝説の〈湖水に映る八月十五夜月〉考

斎藤 菜穂子

一、はじめに

『源氏物語』は、読み継がれ権威化・古典化されていく中で、その執筆契機が伝説的に語られるようになった。のちに『源氏物語湖月抄』（延宝元年（一六七三）成立）の名称が示すように、湖に映る名月に紫式部が感興を覚えて起筆したイメージをもって受容されていく。

それは「八月十五日の月が湖に映る」景として、『河海抄』や伝為氏筆「源氏古系図」付載の「源氏物語のおこり」（以下、「伝為氏「源氏物語のおこり」と記す）に表されたのだが、なぜこの景は描かれたのだろうか。伝為氏「源氏物語のおこり」では、八月十五日の水に映る月は文脈において必然性がない。^①『河海抄』では「八月十五日の月」を、『源氏物語』の須磨流謫での「月のいとほなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけり」（須磨巻）と関係付ける。しかし須磨の月は水に映るものではなく、あえてそう表現した意図が何か存するはずだ。また、現在「源氏の間」

が存する石山寺の本堂内から「湖」を見ることは不可能なのであり、^②地理的合理性を無視して「湖月を見て」と設定された所以についても考えたい。中世における注釈書の叙述が拠った当時の思想の一端を、検討することになる。

二、『源氏物語』起筆伝説の展開

まず『源氏物語』の起筆伝説を、現存記事において内容の近いものをまとめつつ概ね成立の早い順に、「石山寺の月」に注意して整理する。

起筆について叙する現存最古の文献は、平安後期頃成立の『古本説話集』「上・第九」だが、物語発想の場面は見えず「石山」も「月」もない。鎌倉中期までに成立した『世継物語』「第五」もこれに近似する。『宝物集』「第五」（治承四年（一一八〇）頃成立）は紫式部の墮地獄説話になるが、起筆の契機にはふれない。院政期成立の『源氏一品経表白』は紫式部の罪障に狂言綺語の文芸観を取り込む。『今鏡』（嘉応二年（一一七〇）頃成立）は広まってい

た墮獄説話に対して、紫式部を観音の化身と見なす自論を述べた。『無名草子』（正治二年（一一〇〇）頃成立）は起筆の時は描かず仏の靈験としている。十三世紀半ば成立の『今物語』には地獄に堕ちて苦しむ紫式部の供養が書かれ、源氏供養はその後も長く語られていく。ここまですべてにおいて「石山寺」・「月」の語は見いだせない。

阿仏尼による『阿仏の文』（弘長三年（一一六三）頃成立⁴）には、若きほどにまたいたくおよすげたるもにくきことにて候。あまりにふえうめきたるもわろく候へば、遅れ過ぎぬほどにわたらせおはしまし候へ。人丸赤人が跡をも尋ね、紫式部が石山の浪に浮かべる影を見て、浮舟の君の法の師に会ふまでこそかたくとも、月の色花のほひもおぼしとどめて、むれいふがひなき御さまならで、かまへて歌よませおはしまし候へ。

と、「若きほど」の人に向けて「遅れ過ぎぬほどに」文芸に取り組むべき心構えを述べる箇所には、「紫式部」と「石山」が書かれる。傍線部で「人丸赤人の跡——をも尋ね」と「紫式部の（石山の浪に浮かんだ）影——を見て」との対構成にし、続く「浮舟の君の法の師——に会ふ」にもそれはつながら、紫式部の面影を思う尊崇の表現となっている。「浪に浮かべる影」を「月影」と読む説もあるかもしれないが、そうすると「紫式部が月光を見て」となり対構成が崩れるうえに、「若き」人へのメッセージという文脈からずれる。ここは尊い先人の「跡」や「面」影に思いを寄せるべきことを主意としているのだ。またこれに先行する『千

載和歌集』「いさぎよき池に影こそ浮かびぬれ沈みやせんと思ふわが身を」（釈教歌・一一三三・源頭仲）が、地獄に沈むと想っているものの寺の聖なる水に自分の影が浮かんだことを救われたと語っているのが参考になる。『阿仏の文』の当該箇所、罪深いとされた紫式部の「影」が「石山の浪に浮か」ぶとは、紫式部の救済をも示唆するとみられる。紫式部を観音の化身とする『今鏡』などの発想によつて、現当二世の利益と救済をもたらす観音菩薩を本尊とし貴族の崇敬を集めていた石山寺が結び付けられたと考えられよう。

やや下る『野守鏡』「上」（永仁三年（一一九五）頃成立）には、「石山の観音其風情をしめし給ひけるとなむ、申しつたへて侍る」と、式部の祈りを石山の観音が叶えて物語が成就したとあるが、「月」は描かれない。『原中最秘抄』（貞治三年（一一三六）成立）の、源親行（一一八〇年頃没）説と考えられる部分には、「此物語之趣石山の観音の御利生なり」（雲隱）・「石山の観音の御ちかひにて作出したりともいへり」（夢浮橋）と見え、紫式部観音説も加えるが、「月」には触れない。

十三世紀後半に『源氏物語』の起筆は石山観音の靈験説話になったが、「月」また「八月十五夜の水に映る月」は見えないのである。

次に『石山寺縁起絵巻』（石山寺蔵、重要文化財）の詞書（以下「縁起詞書」と記す）を検討する。絵巻全七巻の成立過程は複雑で、源氏起筆を描く巻四の成立は十五世紀末である。だが近年の研究で詞書は正中年間に全七巻分成立していたとされる。⁷ また真言寺院

だった石山寺に一二三〇〇年頃東大寺が介入しており、それへの対抗意識も背景に、寺の独立性と京の貴神とのつながりを宣揚した「縁起」が制作されたとも考えられている⁽⁸⁾。巻七第四段には、正安元年（一二九九）、「後宇多院当時の留記を開きて、叡念を起し御座しましける」と、石山寺縁起旧記を後宇多院が読み霊験あらたかだったさまが描かれていて、貴顕への積極的な流布と価値付けの意欲がうかがわれる。これをやや遡る頃に世に語られていた（阿仏の文・『野守鏡』）石山寺と『源氏物語』との関わりは、貴族の興味を惹き寺独自の価値付けを高めるものであり、石山寺側が早々に縁起に撰取した可能性は高く、やはり正中年間には書き込まれていただろう。該当部分を引用する。

…当寺に七か日籠り侍りけるに、水海の方、遙々と見渡されて、心澄みて様々の風情眼に遮り心に浮かみけるを、とりあへぬ程にて、料紙などの用意も無かりければ、大般若の料紙の内陣にありけるを、心の中に本尊に申しうけて、思ひあへぬ風情を書き続けける。彼の罪障懺悔の為に、大般若経を一部書きて、奉納しける。〔第一段〕

起筆の契機の時を具体的に説明し、紫式部が石山參籠において、遙かに湖の方を見晴らし心澄んだことよって物語発想が導かれたと表現する。しかし「月」には触れない。

『河海抄』「巻第一料簡」（貞治元年（一二三二）頃成立し後に増補）に、「月」が「八月十五夜の月」としてあらわれる。

…石山寺に通夜してこの事を祈り申しけるに、折しも八月十五夜の月湖水に映りて、心の澄みわたるまに、物語の風情

空にうかがけるを、わすれぬさきにとて、仏前にありける大般若の料紙を本尊に申しうけて、まづ須磨・明石の両巻をかきはじめけり。これによりて、須磨の巻にこよひは十五夜なりけりとおぼしいで、とは待るとかや。のちに罪障懺悔のために、般若一部六百巻をみづからかきて奉納しける。

「縁起詞書」の表現と多く重なる。「詞書」をもとに、「八月十五夜」の名月が水に映った様の記述とそれにつながる須磨巻の説明を追加しており、「のちに罪障…」の接続がやや不自然になっている。「縁起詞書」よりも下るだろう。

『河海抄』より成立が早い可能性も論じられている伝為氏「源氏物語のおこり」⁽¹⁰⁾を見る。

…石山にまうでて祈り申すに、八月十五夜の月水海に浮かびてあきらかなるをみて、心の澄みけるに、第三巻をことにたぐひなくつくれりとして紫式部といはれたり。

『河海抄』と同じく「八月十五夜の月」だ。「阿仏の文」・『野守鏡』が簡略な表現で起筆と石山寺とのつながりを示唆して月に触れないことと比べてとき、この書き物がそれらに先行するとは考えにくい。叙述内容が重なる『河海抄』とはほぼ同時代と見るのが穏当だろう。

起筆説話において「月」の描写は、十四世紀半ば過ぎ成立の『河海抄』・伝為氏「源氏物語のおこり」になり、（八月十五夜の水に映る月）として現れることが確認される。この時期に注釈書や梗概書においてこう表現されるようになった所以を以下考察していく。

三、平安朝期における石山の月

そもそも水に映る月のイメージは石山寺において一般的であるのか、貴族の心性を表す和歌や文学作品の用例を取り上げて分析する。

「石山の月」は和歌において用例が多くはない。早い時期に詠まれた歌をあげる。

A いつまでか影とどむべき石山の谷にこもれる有明の月（山田法師集） 一一「石山に百日さぶらひて、まかでなむとせしころ、

有明の月の谷にうつりて待りしかば（義孝集）

B 有明の月のそらにて山の端（山の上暁月）のふかくもそらにしりにけるかな
傍線部のように明け方の月を詠む歌が散見される。『公任集』

（三八三）にも「あかつき月夜に石山よりいで給ふとて：」の詞書がある。参詣者は、通夜で祈り石山寺を離れる暁方に眺める月の情景を、印象深いものとして共有しただろう。また石山寺は岩盤に乗る観世音菩薩を囲う山岳寺院であり、波線を施したように、「谷」や「山の端のふかく」など高低差や距離の感覚をもって月光が捉えられたことも意に留めておきたい。石山の「水に映る月」や「八月十五日の月」が和歌の主題になることはなかった。

続いて、平安朝の散文文学作品における「石山の月」を検討する。石山寺の参籠を体験としてかな文で綴る日記文学が参考になるろう。

『蜻蛉日記』の石山詣の帰途に、「空を見れば、月はいと細くて、

影は湖の面にうつりてあり。風うち吹きて湖の面いと騒がしう、さらさらと騒ぎたり」（中巻・天禄元年）とある。夢告を受け暁方に寺を下りて舟に乗り、空の月を見てからそれを辿るように水に映る月光へ目を向ける。石山参籠で浄化され帰京する際の聖性に満ちた暁の情景である。ここでは空の月に言及した後湖水面の月を述べるが、『河海抄』・伝為氏「源氏物語のおこり」は映る月のみを象徴的に描いて起筆の契機としていたことも注意しておきたい。

『蜻蛉日記』では地理的に合理性を持った描写だが、『河海抄』や伝為氏「源氏物語のおこり」では、石山寺本堂からは見えない湖に映る月を描き、物語発想の契機としている。堂にいて月を認めることは、例えば『更級日記』の再度の石山詣では、「部を上げれば見れば、有明の月の谷の底さへくもりなく澄みわたり」と、「有明の月」が「谷の底」まで差し込むのを見下ろす様として書かれた。谷に差す月光はA歌に近似し、共有されたイメージだった。先の『蜻蛉日記』にも、「堂は高くて、下は谷と見えたり」に続いて、「二十日月、夜更けていと明くなれど、木陰にもりて、ところどころに來しかたぞ見えわたりたる。見おろしたれば、麓にある泉は、鏡のごと見えたり」と堂から谷を眺め下ろし、木陰越しに月光が下の道に差すと述べ、麓の泉も鏡のようだと表す。先述したように高低差の距離は、崖の上に建つことの多い観音霊場のひとつである石山寺の特徴だった。

散文作品においても、石山寺で「水に映る月」が表現されることはほとんどなく、遙か向こうの「湖に映る月」も描かれない。

やはり『河海抄』などの、石山寺にいながら湖に映る月を眼前にすると情景は、何らかの意図をもって描出されたものと考えられる。

四、「月—水—身」から「月—水—心—澄む」へ

〔琵琶湖の〕水に映る月が『河海抄』などで描出された所以を検討するために、「水に映る月」の表現の歴史を辿る。

早い例は漢詩文に見られ、『凌雲集』（弘仁五年（八一四）成立）に小野永見「遊寺」の「水月非真曉—空花是偽春」がある。水に映る月（水月）の実体のなさが真ならぬもの象徴とされる。その後、「水月」と「空観」を結びつける例が散見する。「空観」とは仏教語で、「一切のものは、ことごとく因縁によつて生じたものであつて、永遠不変の自我や実体といったものはなく、すべて空であると観じること」（『日本国語大辞典』）だ。菅原淳茂は「水月之相応 空観自生」（『本朝文粹』二〇九「八月十五夜侍亭子院同賦」）月影満秋池 応太上法皇製」と、水に映る月のさまが空観を導くと詠む。その父道真も「偏将水月—苦空観」（『菅家後集』五〇六「晚望東山遠寺」と、水月による空観を詠じる。大江朝綱の「雖レ観秋月波中影—未レ遁春花夢裏名」（『和漢朗詠集』「無常」七九四）は「波中影」と表し、水に映る月を観しても煩惱からは逃れられないとする。漢籍や仏教的発想を知悉した知識人によつて、実体のない水月は仏教の「空」の観念を導くものとして表現されたのだった。

和歌において水に映る月は、「秋の月波のそこにぞいでける

まつらん山のかひやなからん」（『拾遺集』秋部・一七二・大中臣能宣「水に月のやどりて侍りけるを」）が山の端からでなく波の底から現れた月の興趣を、「照る月のいはまの水にやどらずはたまる数をいかで知らまし」（『金葉集』秋部・一八一・源経信）が水の玉に映るいくつもの月という機知を表現するなど、美的景物として詠じられていた。その一方で、「維摩経方便品」における人の身のはかなさを譬えた「十喻」のひとつとして詠む歌が散見される。早い例では、

C 水の上にとどれる夜半の月影のすみとくべくもあらぬ我が身（『公任集』二九〇「ゆいまゐの十のたとへ」此身水の月のごとし）が「身のはかなさ」の観念を叙情的に歌う。『後拾遺集』には同じ「十喻」の「この身水月のごとしといふ心を」の一首（『雑六誹諧歌』一一九〇・小弁）が見える。『千載集』にも「維摩経十喻、此身如水月中」といへる心をよめる」と詞書される「釈教歌」部の詠（一二三四・藤原永範）がある。「水に映る月」は漢詩の例と同じく仏教思想を背景に、経文由来の「身のはかなさ」が表現されたのだった。

十二世紀末頃まで用例の見えるこの「月—水—身」と重なりながら交替するように現れるのが、「月—水—心」を詠む和歌である。勅撰和歌集における初例は次の『後拾遺集』歌となる。

D みくさるしおぼろのしみづ底すみて心に月の影は浮かぶや（『雑三』一〇三六・素意「良運法師大原にこもりぬぬとききてつかはしける」）

僧侶同士の挨拶歌で、水に浮かぶ月のように心は澄んでいるかと（12）

の問かけに、返歌（二〇三七）は「すむ名ばかりぞ」と応じる。また『金葉集』の「池みづに今宵の月をうつしても心のままにわが物と見る」（一八〇・白河院「寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて詠池上月といへることをよませ給ひける」）は、中秋名月の光の美しさを自在に感受する満足を詠む。

「月―水―心」の和歌には仏教的発想に基づく歌と美的感性による歌があり、ともに水に映る月は、心澄んでよろこばしいありようとして詠われている。それは先の「月―水―身」の「澄むことのできない我が身」と異なる。この「月―水―心」における肯定的な「澄む」には、「月―心―澄む」として共有されていたイメージが関わると思われるので、以下検討する。

それは『金葉集』に数例見出せる。「いづくにも今宵の月を見る人の心やおなじそらにすむらん」（秋部・一八二・藤原忠教「既明月といふ事をよめる」）は、明月によって心澄むことは「いづくにも」と普遍性があるとする。「三笠山もりくる月の清ければ神の心もすみやしぬらん」（秋部・二〇三・藤原顕輔「詠月歌」）は月光から春日明神の心を付度している。これらは「月光によって心が澄む」という清冷な景と情を詠じる。

また次の歌に注意したい。

E よととも心に心のうちにすむ月をありと知るこそはるるなりけれ（雑部下・六四二・澄成「常住心月輪といへる心をよめる」）

ここで主題となっている「心月輪」は仏教用語で、密教の修行において行者が自身の「心」を清浄で円満な「月輪」だと観じ仏の悟りの本体と同一になることであり、その観想を「月輪観」と

言った。山田昭全は、「月輪観を通じておのれの心が円く清浄だと自覚した修行者」は「彼自身が大日如来と同等の境地に立ったことを意味する。つまり、この禪観の目的を完全に達成した修行者は、そのまま仏になった（＝即身成仏した）」ということになる」と説明し、月輪観が平安時代末に流行したことを述べる。『後拾遺集』には「月の輪に心をかけしゆふべよりよろづの事を夢とみるかな」（雑六誹諧歌・一一八八・寛超「月輪観をよめる」）が見えて、月輪観はすでに和歌の主題になり勅撰集に採られ貴族にも認知されていた。平安時代後期に経文が題として用いられ無常観を詠んだ歌も増加し、「釈教歌」が「千載集」で独立した部立になったのだが、そこにおいて月輪観流行期の『新古今集』全二十巻の巻

軸歌（釈教歌）部が月輪観を詠む歌であることに注意したい。F 聞晴れて心の空に澄む月は西の山辺や近くなるらむ（二九

七八・西行「観心をよみ侍りける」）

詠者は自己の心の本性の観照である「観心」を仏性の暗喩の「月」に拠って行っていて、月輪観をモチーフとする歌だ。これが「釈教歌」の一首かつ巻軸歌であることは、当時の貴族の精神性に月輪観は深く影響を与えていたと言える。月輪観についての「月―心―澄む」の用例が散見するなかでも、この歌の存在は重視される。

前掲山田論が月輪観と関わって、「中世の和歌文学は心を肯定するところの密教的思考法を基盤にして成り立っていた」と述べるのはきわめて示唆的である。「月」とともに「心―澄む」とする表現は中世になる頃には月輪観と結びつき、C歌における澄め

ない「身」は、ここにおいて肯定的な仏教性をまとった澄む「心」となるのだ。⁽¹⁷⁾

「月―心―澄む」に釈教のイメージが濃くなることと、「月―水―心―澄む」の仏教要素を含んだ発想は重なってくる。D歌は僧同士の機知的コミュニケーションだったが、その後は貴族にも「月―水―心―澄む」ことが仏との結びつきとして詠われる。

G 照る月の心の水にすみぬればやがてこの身に光をぞさす〔千載集〕釈教歌・一二二八・藤原教長「即身成仏の心を」

は「釈教歌」部に載り、心に水を湛えているような清浄なありようをいう仏教語「心水」を用いて、まさに月輪観に拠って即身成仏することを詠じる。「心の水」は和歌に折々詠み込まれ、例えば、

H くもりなくむなしき空にすむ月も心の水にやどるなりけり
〔統後撰集〕釈教歌・六二三・素覚「法文百首歌よみ侍りけるに、菩薩清涼月、遊於畢竟空の心を」

は、空の月が「心の水」に映ることを仏性の感応としている。また、

I ながむれば心の底ぞ澄みまざる三井の清水に映る月影〔玉葉集〕釈教歌・二六九〇・道珍「釈教の心を」

は、三井寺の名高い清水に映る月影を眺めて心澄むと歌うもので、参詣する貴族の信仰心を反映している。

G・H・I歌は仏性のあらわれである水に映る月光によって心「澄む」と詠じ、仏との同一化が感受されている。それには、大乘仏教において根本的な仏の身体のある方「三身」（法身・報身・応身「化身とも」）の思想が背景にある。「法身」は宇宙の真如そ

のものとしての永遠身、「報身」は仏性のもつ属性で衆生はそれを受けて成仏できる受用身、「応身」は衆生の前に現れる現実身（具体身）である。「念仏三昧宝王論」（巻中）には「法身者如二月之體、報身者如三月之光、化身者如二月之影、萬水之内皆有月焉」と、仏の応身（化身）は機縁に従って現れて水に映る月光のように世界に遍在すると説明される。⁽¹⁹⁾ 水に映る月の光は仏の顕現と認められていたのだ。

それについて、「水のおもに光をわけてやどるなり同じみ空の秋の夜の月」〔統拾遺集〕釈教歌・一三七四・道宝「眞法身猶如虚空応物現形如水月中といへる心を」が参考になる。詞書において、「眞法身」がその姿を応身として現すのは水の有りようそれぞれに映る月のようなものだとする「金光明経」の一節を引き、水に宿る月光に仏を感受すると詠じている。勅撰集に採られており、この仏性観は十三世紀後半には広く知られていたのだ。G歌は「照る月の心の水にすみぬれば」「やがて」と心の水に澄む月がそのまま自己の身の「光」になると詠じ、H歌は究極絶対の空にある「菩薩清涼月」も自己の「心の水」に宿っていると詠嘆し、またI歌では「清水に映る月影」を眺めることで心の底までも澄みまさっていくと述べる。これらもみな水に映る月光によって仏性を身に受けることを歌うもので、三身思想の影響を受けていると考えられる。

「月―水―心―澄む」の表現は中世になる頃からの、「月輪観」への関心の高まり、「心水」という觀念の広がり、また大乘の仏性観への理解の深まりを背景にして、清浄性や仏との合一性への

希求と結ばれたのだった。『河海抄』には「式部は檀那贈僧正ノ許可を蒙て天台一心三觀の血脉に入れり」（巻第一料簡）とあり、中世に色濃くなる仏教イメージの影響を受けていることは明らかだ。『源氏物語』の起筆伝説を広汎に論じた伊井春樹は『河海抄』に天台教学が様々に摂取されていることについて、物語を「仏道⁽²⁰⁾の方便の書とする評価が一般的であった時代の思想」と意味づけ⁽²⁰⁾ており、重要な指摘である。「水に映る月」が「心澄む」とともに起筆の契機として『河海抄』に象徴的に組み込まれたのは、右に述べてきたような当時の釈教的発想や表現を背景にしたものであると考えられる。

五、聖なる琵琶湖との距離

また、『河海抄』では「湖水に映りて」、伝為氏「源氏物語のおこり」では「水海に浮かびて」と、石山寺で琵琶湖に映る月を見ると表現していることから、琵琶湖と関わる「心澄む」について検討したい。

琵琶湖は古代からの聖地で、琵琶湖の水に映る月を「澄む」と詠む和歌は多い。『千載集』神祇歌の「いつとなく鷺のたかねにすむ月のひかりをやどす志賀の唐崎」（二二七六・性憲「日吉大宮の本地をおもひてよみ侍りける」）では、七瀬祓所のひとつでもある琵琶湖西側の志賀の唐崎が靈鷲山の仏の光（月光）を宿すと表し、院政期から喧伝された本地垂迹思想に拠っている。またI歌は、琵琶湖畔三井寺の世に知られた清水に映る月影を眺めて、「心の底ぞ澄みまさる」と「釈教の心を」詠じていた。

琵琶湖に関わる水は神祇・釈教の心とつながって「澄む」ものだった。『源氏物語』の現存起筆説話において初めて物語発想の瞬間を綴る『石山寺縁起絵巻』詞書には「月」は描かれず、「水海の方、遙々と見渡されて、心澄みて」と書かれていたのであり、A・B歌や先掲『蜻蛉日記』・『更級日記』と同様に本堂からの高さや距離の実感をもって瀬田川を遡る湖の方を望むさまを叙述した。「詞書」は石山寺の地理的特性をもとに、紫式部が聖なる「水海の方」を「遙々と」眺めやり「心澄んだこと」によって物語は発想されたとする。一方、これよりやや下る『河海抄』伝為氏「源氏物語のおこり」はその距離感を有さず、琵琶湖に映る月を目にしたことを執筆契機としている。それは「三身」理念により水月に仏の現れを見て、また「月輪觀」を背景に水に映る月と澄む心を重ねるもので、湖が近くにある印象を与える。このイメージは、琵琶湖畔でかたわらの清水に映る月に目を向けて心澄むとするI歌と近く、この歌の発想が直後に成立する『河海抄』に影響を与えた可能性も考えられる。

「縁起詞書」において石山寺本堂から湖の方を遙かに望んで「心澄み」が導かれると描かれたのは、様々な縁起説話を集成する「縁起詞書」が起筆の契機をもたらずに十分な靈験をすでに内包しており、そして神社縁起は史実と同等とみなされていて本堂から「水海の方へ遙々と」という地理的整合性を重視したからと見えよう。先述したようにこの縁起の成立には石山寺独自の価値付けがもくろまれていたのであり、寺固有の地理は不正確にはできない。一方『河海抄』や伝為氏「源氏物語のおこり」では、靈験

性を自ら表現して物語起筆の契機に説得力を持たせる必要があった。そこで、当時広く認められていた仏教理念に拠る「水に映る月―澄む」の発想を撰取し、聖なる琵琶湖に映る仏性の月光を受けて「心澄む」と表現して、聖典化されつつあった『源氏物語』起筆の靈驗性を確保したと考えられる。石山寺の場に即した靈驗の宣揚が意図された「縁起」とは異なつて、注釈書・梗概書では当時の仏教・文芸思潮に拠ることで説話の形成がなされたのだつた。

六、八月十五夜月の意味

最後に、『河海抄』・伝為氏「源氏物語のおこり」で執筆契機を「八月十五夜」としている意味について検討したい。先述したように、『河海抄』では須磨巻の「今宵は十五夜」と結びつけるのだが、中秋名月にふさわしい叙述がなされているわけではなく、文脈における必然性には乏しい。この頃までの「八月十五夜の月」のイメージを探り、この景物導入の所以を捉えたい。

「八月十五夜の月」は十世紀半ばには屏風歌の歌題としての用例が多く、「水」が詠み込まれるものも少なからず見える。「このねも池の底ひも大空のさやけき月にひかれてぞすむ」（尊経閣本『元輔集』二七「八月十五夜、人の家の池に舟どもうけて、乗りてことひくところ」）²³は貴族の優雅な暮らしにおける中秋の月光の美を詠う。八月十五夜月は、「底ひも――ひかれてぞすむ」など格別に明るく澄んだ光と表現され、それは中秋の感覚として共有されるものだった。本稿では以下、先にも検討した「澄む」の語と中秋

明月の組み合わせに着目し考察する。

勅撰集では『金葉集』以降に用例が散見する。「水きよみやどれる秋の月さへや千代まで君とすまむとすらむ」（『詞花集』秋・九四・源順「三条太政大臣の家にて、八月十五夜に水上月といふことをよめる」）は、水に映る月を「千代まで」「澄む」と永続性をもつて詠い、予祝的な賀の要素がある。『玉葉集』以降「賀」部にも入集し、「雲のうへに光さしそふ秋の月やどれる池も千代やすむべき」（『玉葉集』賀歌・一〇七一・藤原為家「同（建保）六年八月十五夜、中殿にて池月久明と云ふことを講ぜられ侍りけるに」）も、「千代」「澄む」と強調している。中世になる頃から、八月十五日の月は慶賀を表すにふさわしい明るく澄んだ景物として認められていたのだ。

八月十五夜月の特別な光は神祇・釈教と関わつても詠まれた。

J宮柱たつる今宵の秋の月またいくたびかめぐりあふべき（『統

古今集』神祇歌・六九六・荒木田延季「文永二年八月十五夜内宮の

御柱だてにあたり侍りければよめる」）

Kひとりのみ波まに宿る月をみて昔の友や面影にたつ（『玉葉集』雑歌四・二三一七・全性「元暦元年世の中騒がしく侍りける比、平行盛備前の道をかたむとて壇の浦と申す所に侍りけるに、八月十五夜月隈なきに、過ぎにし年は経正、忠度朝臣などもろともに侍りけるを、いかばかりあはれなるらむと思ひやられてその由申しつかはすとて」）

J歌は中秋満月において伊勢の神祇を詠む。K歌は仏教的発想によつて、亡き平家公達の靈魂を「壇の浦」の水に映る「くまなき」中秋名月に見ている。澄みまさる中秋満月の光は、十二世紀末頃

から神祇・釈教にもつながる非日常性の顕現の表象として歌われており、十三世紀・十四世紀には勅撰集に採られてその発想は認知されたのだった。

さらに、中世の前期から中期に移るに当たって、八月十五夜は特に文雅の時として捉えられる傾向が強まっていく。八月十五夜には歌会などが盛んに行われ、勅撰和歌集において「八月十五日」の折柄の歌であると明示されることが多くなる。「八月十五日」の用例は、『続古今集』までは一桁で推移するが、『続拾遺集』・『新撰撰集』になつて十四例と増え、その後若干の増減があり、『新千載集』に至つて三十七例を数える。各集の総歌数に差異はあるが、八月十五日の詠歌と明示して勅撰集に採られる例が増加する傾向が確認され、中秋十五夜は文雅を愉しむ時と認められていくことが分かる。特に『新千載集』においては総歌数自体が多いものの用例が激増し、恋部（二四一番歌以降八首）などにまで書き込まれた背景として一考される。

中世に八月十五日の月は、澄みわたる非日常的な光として慶賀や神祇・釈教の歌に詠じられ、文雅の時としての認識も高まっていった。『河海抄』などはそれらのイメージを撰取することで、誉れ高い『源氏物語』の起筆の契機の必然性を確保したと考えられる。

七、〈湖水に映る八月十五夜月〉の定着

以上、『河海抄』・伝為氏「源氏物語のおこり」の、「湖に映る

八月十五夜月よつて心澄む」という起筆のモチーフは、聖典化されつゝあつた『源氏物語』の起筆の契機として十分な仏教的靈感を示すことを意図したものであると述べた。具体的には、中世に入る頃から認知されていった「月―水―心―澄む」という「水に映る月を観ずることによつて心澄み仏と一体化する」イメージと、とりわけ澄んで神祇・釈教の色合いも帯び文雅の時としても認められてきた「八月十五日の月」を取り込んで描出された情景であることを指摘した。

この景物は王朝的な雰囲気を含みつつ仏の靈験を象徴的に表すもので、本地は観音と見なされるようになった紫式部の『源氏物語』の起筆にふさわしく、その後も流布していく。伝為氏「源氏物語のおこり」を元に加筆した室町初期の『源氏大鏡』、この『源氏大鏡』に近似する『源氏増鏡』、そして秀吉自筆本「源氏物語のおこり」（専修大学図書館蔵）等には、「（八月）十五夜の月」・「湖に浮かびて」・「心―澄み」が書かれており、またこれらの表現は『河海抄』を撰取する『明星抄』を介して『湖月抄』に受け継がれる。

現在の石山寺「源氏の問」からも目にするのでできない「八月十五夜月が湖水に映る景」のイメージは、中世初期から前期における仏教思潮や文芸の動向を注釈書が撰取したことで作られ、定着していったものなのである。

※本文引用は、『源氏物語』・『蜻蛉日記』・『更級日記』・『和漢朗詠集』は『新編日本古典文学全集』に、『阿仏の文』・『凌雲集』は『群書

類従」（『阿仏の文』は「乳母のふみ」に拠る）に、『野守鏡』は「日本歌学大系 四」に、『原中最秘抄』と伝為氏筆「源氏古系図」一付載「源氏物語のおこり」は「源氏物語大成 七」に、『石山寺縁起絵巻』詞書は「日本絵巻大成 18」に、『河海抄』は玉上琢彌『紫明抄・河海抄』に、『本朝文粹』は「新日本古典文学大系」に、『菅家後集』は「日本古典文学大系」に、「念仏三昧宝王論」は「浄土宗全書 六」に、和歌は『新編国歌大観』（『金葉集』は二度本）（Web版）に拠った。表記を私に改めたところがある。

注(1) 宮川葉子「源氏物語起筆伝説の作者——澄憲作「源氏一品経表白」との関連を中心として——」（『上坂信男編「源氏物語の思惟と表現」一九九七年、新典社』は先行する漢詩によってこの月の描写が意味を持ったことを述べるが、それらの詩句が読者に広く認識されていたとは考えにくい。

(2) 当時の「水海」（琵琶湖）は現在の瀬田川の一部も指したが、石山寺の傍らの瀬田川は湖と数キロの距離があり、また本堂からはその瀬田川も見ることできない。

(3) 源氏供養については小峯和明『中世法会文芸論』（二〇〇九年、笠間書院）、小林健二「能《源氏供養》制作の背景——石山寺における紫式部信仰——」（『描かれた能楽 芸能と絵画が織りなす文化史』（二〇一九年、吉川弘文館）に詳しい。

(4) 岩佐美代子「宮廷女流文学読解考 中世編」（一九九九年、笠間書院）に拠り、「二六三年頃の阿仏尼作とし、田淵旬美子「女房文学史論——王朝から中世へ——」（二〇一九年、岩波書店）に拠り「阿仏の文」の名称を用いる。

(5) 寺本直彦「源氏物語受容とその周辺の諸問題」『源氏物語受容史論考 続編』（一九八四年、風間書房）の考察に同意される。

(6) 日向一雅「源氏物語の歴史的文化論的研究——注釈史における儒教的言説と物語の方法——」（『明治大学人文科学研究所年報』二〇〇九年三月）の把握が妥当と思われる。

(7) 相澤正彦「石山寺縁起絵巻」詳解（相澤正彦・國賀由美子編『石山寺縁起絵巻集成』二〇一六年、中央公論美術出版）。

(8) 注(7)に同じ。

(9) あるには逆に、紫式部と観音とのつながりによって石山寺側で作りに上げられた「石山寺における起筆説」が、『阿仏の文』や『野守鏡』に影響を与えた可能性もある。

(10) 注(1)宮川論。東望歩「源氏物語 起筆に関する大齋院説話について」（『名古屋大学国語国文学』二〇一〇年十一月）は前後関係を不明とする。

(11) 国枝利久「維摩経十喻と和歌——釈教歌研究の基礎的作業（六）——」（『仏教大学研究紀要』一九八〇年三月）が述べるように、そもそも「維摩経十喻」に「此身如水中月」の喩は存せず、公任の思い違いによる可能性がある。

(12) 渡部泰明「千載集の主題——月をめぐる——」（『中世和歌の生成』（一九九九年、若草書房）の「水草の茂る水に映る月は、仏法の喩になりうる」との指摘に合致する。

(13) 橋本不美男「院政期の歌壇史研究」（一九六六年、武蔵野書院）が指摘する、堀川朝初期の歌壇の細分化・深化また堀川院歌壇の崩壊による中世の萌芽と関わり。

(14) 山田昭全「月輪観と中世和歌——山田昭全著作集 第三卷 釈教歌の展開（二〇二二年、おふう）が詳細に説明する。

(15) 有吉保編『和歌文学辞典』（一九九一年、桜楓社）「釈教歌」の項目から。

(16) 注(14)山田論は月輪観を教理的に整備した覚鑠から西行へのつながりを述べる。

(17) 半沢幹一「古代和歌における「身」と「心」——表現の対比性を中心として——」（『文芸研究』一九九八年三月）の、「身」に比して、「心」は主従性において主になる一方自己同一性を強く主張しないとの理解は、仏性に重なる「心」として領かれる。

(18) 注(12)渡部論が指摘する、『千載集』の月における仏威との感応

が認められる。

- (19) 大正大学総合佛教研究所唐中期仏教思想研究会編著『念佛三昧寶王論の研究』(二〇〇九年、ノンブル社)、『総合仏教大辞典』(二〇〇五年、法蔵館)「仏身」を参照。
- (20) 伊井春樹「源氏物語の別伝」『源氏物語の伝説』(一九七六年、昭和出版)。

(21) 琵琶湖は日本唯一の「古代湖」であり、縄文時代から人が住んでいた可能性が遺跡等から考えられ、また京都方面からは「東方浄土」と見なされてもいた。周囲の山々から水が注ぎ込み、地下水も湧き出ているその湖水は信仰の対象とされていた。

(22) 平田英夫「神域の月の風景——神祇歌の生成——」『和歌的想像力と表現の射程 西行の作歌活動』(二〇一三年、新典社)は、院

政期頃からの本地垂迹思想と関わって月は鏡と重なり神と仏を結び付ける機能を持つと論じ、「いつとなく」歌も引用して神祇と釈教は切り離せないと指摘しており、同意される。また注(12)渡部論における「水に映る月自体神意の顕現」との考えを稿者も認めつつ起筆説話にある「心」「澄む」との関わりに注視している。

(23) 注(7)に同じ。

(24) 田島智子『屏風歌の研究』(二〇〇七年、和泉書院)は、「安和二年(九六九)七月二十一日左大臣師尹五十賀屏風」とする。

(25) 稲賀敬二「中世源氏物語梗概書」『源氏物語の研究——成立と伝流——』(一九六七年、笠間書院)、寺本直彦「宗祇と源氏物語」『源氏物語受容史論考』(一九七〇年、風間書房)に詳細に整理されている。

新刊紹介

岩下紀之監修

日比野浩信・小椋愛子・田崎未知編著

『連歌断簡資料集』

編著者、日比野浩信所蔵の連歌関係の断簡の影印に、翻刻と解題を付したもので。以下、伝承筆者と所収資料の一部を列挙する。

素眼「菟玖波集切」(二葉)、池田正能「竹林抄切」(三葉、広幢「竹林抄切」、行助「竹林抄切」、山崎宗鑑「犬筑波集切」、武田元信「下葉切」、飛鳥井頼孝「老葉注切」、宗長「老葉注切」(二葉)、十市遠忠「老葉注

切」、周桂「老葉注切」、寿慶「老葉注切」(二葉)、細川幽齋「老葉注切」、猪苗代兼純「芝草句内岩橋切」、専順「専順句集切」、溝杳柳江「紹芳連歌切」、三条西実隆「壁草切」、万里小路惟房「春夢草切」(二葉)、白河雅喬「永享十二年十月十五日百韻切」、橋本公夏「十花千句注切」、未詳「伊勢千句注切」、堯孝「称名院追善千句注切」(二葉)、紹巴「五吟二日千句切」、良想法親王「慶長五年十月二十五日和漢切」、杉原賢盛・宗祇「未詳句集注切」、靈元院「宗長百番連歌合切」(二葉)、未詳「式目歌切」、増運「連珠合璧集切」(二葉)、後土御門院「古今連談集切」、円空「ささめご

と切」(二葉)、冷泉持為「ささめごと切」(二葉)、徳大寺公維「老のすさみ切」、後柏原院「若草記切」、邦輔親王「詞林三知抄切」など。なお、未詳断簡もあり、本書が研究の端緒となろう。

連歌の専門家でなくとも、日比野浩信『はじめての古筆切』(和泉書院二〇一九年)で古筆切の見方を学習した読者は、その応用編として本書を手取るのも良いだろう。

(二〇二一年三月一〇日 和泉書院 A5 判 二三四頁 本体三二〇〇円) [御手洗靖大]